

平成 20 年度理事会，評議員会ならびに総会における報告承認決定事項

第 51 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会は，門脇孝会長主宰のもとに平成 20 年 5 月 22，23，24 日の 3 日間，東京国際フォーラムにおいて開催された。これに先立つ理事会，評議員会は 5 月 21 日帝国ホテルにて，また総会は 5 月 22 日東京国際フォーラムホール A にて開催された。

1. 第 51 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会の経過報告 (門脇会長)

2008 年 5 月 22 日から 24 日の 3 日間，「ともに歩む新しい糖尿病学の半世紀—希望と挑戦—」をメインテーマに，東京国際フォーラムを主会場として第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会を開催いたしました。このメインテーマには，これまでの日本糖尿病学会が築いてきた 50 年の伝統をもとにして，世界中の研究者，医師，コメディカルのみならず，患者さんや社会全体と手を携えて，糖尿病克服という希望に向かって挑戦していこうという願いを込めました。このため今回は，海外から IDF 会長をはじめ 50 名に上る第一線の基礎あるいは臨床研究者，教育者の先生方にご参加いただき，現在世界の糖尿病学や糖尿病治療が直面する問題について会員の皆様と直接議論を交えかつ個人的にも親交を深めていただけたのではないかと考えております。また，明日の糖尿病学・糖尿病医療をなう学生や研修医の先生の参加費を無料あるいは半額にしたこともあり，本学術集会にはこれまでで最多の 11,623 名(含：学生 678 名，研修医 156 名)もの方々にご参加頂くことができました。特別講演では，小坂樹徳先生，Bruce Spiegelman 先生，山中伸弥先生に，糖尿病学のこれまでの歩み・現在の糖尿病学が挑み解明しつつある諸問題・医学の飛躍的な発展がもたらす希望を，それぞれのお立場からお話しいただき，糖尿病克服のための明日からの診療・研究への意欲と勇気を一層奮い立たせていただきました。また，4 つの特別シンポジウム，2 つの公募シンポジウムを含めた 22 のシンポジウムと 1 つのワークショップ，14 の教育講演，過去最高の 1,767 題の一般演題の全てにおいて，すばらしいご発表と活発なご討論をいただきました。市民公開講座では，田嶋尚子先生をはじめとする医師・コメディカル・患者さんの代表によるディスカッション，オペラ歌手森麻季さんの歌など，4,500 名を超える市民の方々にも楽しみながら糖尿病への関心を高めていただけたのではないかと考えております。

また，我が国の糖尿病患者数は現在 820 万人で予備群も含めると 1,870 万人と増加の一途をたどっている

現況を鑑み，本学術集会では糖尿病やその合併症に対する国民の正しい認知の向上をはかるため，「東京宣言 2008(STOP the DM-Diet and More Exercise-)」を発表するとともに，糖尿病の予防や患者さんの健康的な食生活に資するためにいくつかの並行企画も実施いたしました。これらはまだまだ未完成の試みではありますが，糖尿病の克服のために「ともに歩む」ことの一環として，このような活動を通して，研究や診療によって得られた成果や知見を広く国民に還元していくことも，私ども糖尿病の医療や研究に携わる者の大切な使命ではないかと考えております。

ただ，今回の学術集会では，予想を遙かに超えた多くの方々にご参加いただいたこともあり，会場が手狭であったり，討論時間を十分お取りできなかったりと，反省する点もいくつかございました。何とぞ，ご容赦の程，お願い申し上げます。最後に，本学術集会にご協力いただきました会員各位にあらためてお礼申し上げます。

2. 平成 19 年度事業報告および庶務報告(岩本理事)

●事業報告

1) 第 50 回年次学術集会

会 長 岡 芳知(東北大学大学院医学研究科)

会 期 平成 19 年 5 月 24・25・26 日(木・金・土)

会 場 仙台サンプラザ，ホテルメトロポリタン，他

参加者 8,400 名

○会長講演 糖尿病の統合的理解を求めて

○特別講演 An RNAi-based Approach to Understanding Metabolic Disease

○特別講演 免疫遺伝学からのメッセージ

○学会賞受賞講演

リリー賞 ①自律神経系を介した臓器間ネットワークによる糖・エネルギー代謝の協調的調節機構

② β 細胞転写因子によるインスリン分泌制御とその破綻

○シンポジウム

1. 新しい治療法 GLP-1 Emerging Role of GLP-1 in the Treatment of Diabetes 他 19 題

○教育講演

1. 糖尿病腎症の寛解を目指した診断と治療 他 12 題

○市民公開講座

テーマ:「食を語る—過栄養時代の叡智と選択」

○口演発表 719 題

○ポスター 1,028 題(内, プレジデントポスター 240 題)

2) 出版事業

①会誌「糖尿病」第 50 巻 4 号, サプリメント 1(抄録集)~第 51 巻 3 号を発行

②糖尿病患者向け指導書

- i 糖尿病食事療法のための食品交換表 第 6 版
200,000 部発行
- ii 糖尿病治療の手びき 改訂第 54 版
30,000 部発行
- iii 糖尿病性腎症の食品交換表 第 2 版
5,000 部発行
- iv 糖尿病食事療法のための食品交換表 CD-ROM 版(ver. 3) 増刷なし
- v 糖尿病性腎症の食品交換表 CD-ROM 版(ver. 2)付き 増刷なし
- vi Food Exchange List 500 部発行

③医師, コ・メディカル向け指導書

- i こどもの糖尿病・サマーキャンプの手引き 第 3 版 増刷なし
- ii 糖尿病食事療法指導のてびき 第 2 版
3,000 部発行
- iii 糖尿病療養指導の手びき 改訂第 3 版
3,000 部発行
- iv 糖尿病治療ガイド 2006-2007 55,000 部発行
糖尿病治療ガイド 2008-2009 110,000 部発行
- v 糖尿病学用語集 第 2 版 増刷なし
- vi 糖尿病遺伝子診断ガイド 第 2 版 増刷なし
- vii 糖尿病専門医研修ガイドブック 改訂第 3 版
2,000 部発行
- viii 小児・思春期糖尿病管理の手びき改訂第 2 版
2,500 部発行
- ix 糖尿病学の進歩 41 集 1,200 部発行
- x 糖尿病の療養指導 2007 1,200 部発行
- xi 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン 改訂第 2 版 10,000 部発行
- xii Treatment Guide for Diabetes 2007 2,000 部発行

3) 第 42 回「糖尿病学の進歩」

世話人 石田 俊彦(香川医科大学第一内科)

会 期 平成 20 年 2 月 15・16 日(金・土)

会 場 サポートホール高松, かがわ国際会議場, 全日空ホテルクレメント高松

参加者 3,130 名

①第 1 日目

A 会場

○レクチャー: 糖尿病療養指導に必要な知識(1)

1. 栄養治療の分子基盤 他 5 題

○レクチャー: 糖尿病療養指導に必要な知識(2)

1. 急性合併症: 糖尿病昏睡への対応 他 6 題

B 会場

○レクチャー: 1 型糖尿病診療の update

1. 連鎖不平衡解析による疾患関連遺伝子探索の現状と課題 他 5 題

○レクチャー: 2 型糖尿病診療の update

1. 2 型糖尿病疾患感受遺伝子 update 他 7 題

C 会場

○レクチャー: 糖尿病の進歩 1(インスリン合成分泌)

1. 2 型糖尿病発症における膵 β 細胞障害の分子機構 他 5 題

○レクチャー: 糖尿病研究の進歩 2(インスリン抵抗性)

1. インスリンによる糖取り込み調節の分子機構 他 6 題

D 会場

○シンポジウム: 糖尿病網膜症の克服をめざして

1. 糖尿病網膜症の成因と進展機構 他 4 題

○シンポジウム: 大血管合併症の克服をめざして

1. 成因としての脂質異常症 他 5 題

E 会場

○症例検討会 1

糖尿病性腎症の治療~蛋白制限と血圧コントロール~

○シンポジウム: 糖尿病の地域戦略

1. 山陰(鳥取県・島根県)における地域での糖尿病対策 他 3 題

F 会場

○プログラム: 糖尿病療養指導士のための update—看護の教育的関わりモデル Version6.0—

1. モデル開発のプロセス 他 5 題

②2 日目

A 会場

○レクチャー：糖尿病療養指導に必要な知識(3)

1. 療養指導とクリニカルパス 他5題

○レクチャー：特別な糖尿病の管理

1. 妊娠糖尿病(内科側から) 他6題

B会場

○シンポジウム：糖尿病対策の現状

1. 厚生労働省における糖尿病対策
他4題

○シンポジウム：メタボリックシンドロームの克服をめざして

1. メタボリックシンドロームの診断
他5題

C会場

○レクチャー：糖尿病研究の進歩3(Vascular Biology と糖尿病)

1. 糖尿病における動脈硬化の形成メカニズム
他5題

○レクチャー：糖尿病診療の将来

1. 耐糖能異常, 低又は高インスリン血症, インスリン抵抗性, 食後高脂血症同時検出のクッキーテストの意義 他5題

D会場

○シンポジウム：糖尿病神経障害の克服をめざして

1. 糖尿病神経障害の成因と診断 他4題

○シンポジウム：糖尿病腎症の克服をめざして

1. 腎症の成因 他5題

E会場

○症例検討会2

糖尿病患者の脳血管障害～TIA をどうするか～

F会場

○シンポジウム：糖尿病に関する大規模研究のまとめ

1. 糖尿病発症予防のエビデンス 他3題

4) 地方会活動

- 第41回日本糖尿病学会北海道地方会
会 期 平成19年11月18日(日)
会 場 北海道大学学術交流会館
会 長 小池隆夫(北海道大学大学院医学研究科病態内科学講座・第二内科)
参加者 507名
- 第45回日本糖尿病学会東北地方会
会 期 平成19年11月17日(土)
会 場 仙台国際センター
会 長 岡 芳知(東北大学大学院医学系研究科分子代謝病態学)

参加者 582名

- 第45回日本糖尿病学会関東甲信越地方会

会 期 平成20年1月26日(土)

会 場 川越プリンスホテル

会 長 片山茂裕(埼玉医科大学内科学 内分泌・糖尿病内科)

参加者 1,178名

- 第76回日本糖尿病学会中部地方会

会 期 平成19年10月20日(土)

会 場 名古屋市立大学構内

会 長 大野恒夫(厚生連尾西病院)

参加者 437名

- 第44回日本糖尿病学会近畿地方会

会 期 平成19年11月3日(土)

会 場 大阪国際会議場

会 長 柏木厚典(滋賀医科大学内科学講座(内分泌代謝内科))

参加者 約2,000名

- 第45回日本糖尿病学会中国・四国地方会

会 期 平成19年10月19・20日(金・土)

会 場 愛媛県民文化会館

会 長 牧野英一(愛媛大学大学院医学系研究科分子遺伝制御内科(糖尿病内科))

参加者 666名

- 第45回日本糖尿病学会九州地方会

会 期 平成19年10月12・13日(金・土)

会 場 ワールドコンベンションセンターサミット

会 長 栗林忠信(古賀総合病院内科)

参加者 1,069名

5) 分科会活動

第22回日本糖尿病合併症学会

会 期 平成19年10月26・27日(金・土)

会 場 つくば国際会議場

会 長 山田信博(筑波大学大学院人間総合科学研究科(医学分野))

参加者 630名

6) 糖尿病週間

平成19年11月12日～18日, 第43回全国糖尿病週間の行事が一斉に行なわれた。テーマは「糖尿病の正しい知識と自己管理」。

7) 国際糖尿病連合会議

・Executive Meeting of IDF(2007.5.6-7, ウィーン)への出席

・IDF-WPR Council Meeting(2007.9.7-8, 香港)へ

- の出席
- ・ Executive Meeting of IDF (2007.12.8-9, ドバイ) への出席
 - ・ IDF Council Meeting (2008.3.29-30, ウェリントン) への出席
 - ・ World Diabetes Day 祝賀行事 (2007.11.13-15, ニューヨーク) への出席
- 8) 普及・啓発・後援事業
- ①第 43 回全国糖尿病週間の共催
期 間 平成 19 年 11 月 12 日(月)～18 日(日)
 - ②日本糖尿病協会への協力
「さかえ」および「つばみ」発行の企画等
 - ③世界糖尿病デーへの参加
 - i 「世界糖尿病デー」記念シンポジウムの開催
平成 19 年 9 月 30 日
 - ii 第 1 回「世界糖尿病デー」関連イベントの開催
平成 19 年 11 月 14 日
 - ④糖尿病キャンペーン「なくそう 減らそう 糖尿病」
平成 19 年 3 月 1 日～平成 19 年 7 月 31 日
 - i 東京地区 平成 19 年 4 月 8 日
 - ii 大阪地区 平成 19 年 5 月 13 日
 - ⑤「メタボリックシンドローム撲滅運動キャンペーン」
平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日
 - ⑥糖尿病の予防と治療を目指してーグリコヘモグロビン(HbA1c)認知向上運動ー
平成 19 年 6 月 3 日, 9 月, 11 月
 - ⑦なくそう減らそう糖尿病 なくそう減らそう歯周病シンポジウム
平成 19 年 7 月 22 日・7 月 28 日
 - ⑧第 10 回糖尿病地域医療研究会総会
平成 19 年 7 月 28 日
 - ⑨第 24 回糖尿病 Up・Date 賢島セミナー
平成 19 年 8 月 25 日～26 日
 - ⑩第 31 回腎不全対策を語るつどい
平成 19 年 9 月 16 日
 - ⑪糖尿病シンポジウム
平成 19 年 9 月 22 日・9 月 29 日・10 月 7 日・10 月 14 日
 - ⑫第 14 回日韓糖尿病シンポジウム
平成 19 年 10 月 5 日～6 日
 - ⑬第 5 回国際自律神経科学会議
平成 19 年 10 月 5 日～8 日
併催：第 60 回日本自律神経学会総会
(5th congress of the International Society for Autonomic Neuroscience held in conjunction

with the 60th Annual Meeting of the Japan Society of Neurovegetative Research)

- ⑭糖尿病予防キャンペーン
平成 19 年 11 月 3 日・12 月 2 日
- ⑮平成 19 年度「食育健康サミット」
平成 19 年 11 月 8 日
- ⑯第 7 回先進インスリン療法研究会
平成 19 年 12 月 1 日
- ⑰第 19 回分子糖尿病学シンポジウム
平成 19 年 12 月 8 日
- ⑱第 32 回腎不全対策を語るつどい
平成 20 年 1 月 27 日
- ⑲「糖尿病の検出・予防」事業
通年

●庶務報告

1) 総会

平成 19 年 5 月 24 日, 仙台サンプラザにて第 50 回通常総会を開催した。平成 18 年度事業報告, 庶務報告, 収支決算報告が承認され, また平成 19 年度事業計画追加および補正予算ならびに平成 20 年度事業計画および予算が承認された。第 53 回会長に加来浩平学術評議員が選出・承認された。

2) 評議員会および学術評議員会

平成 19 年 5 月 23 日にそれぞれ開催された。

3) 理事会

定例理事会は平成 19 年 5 月 23 日, 12 月 2 日, 臨時理事会は平成 19 年 4 月 8 日, 9 月 30 日, 平成 20 年 2 月 14 日の合計 5 回開催された。

●会員状況報告(平成 20 年 3 月 31 日現在)

1. 役員等

1) 役員

理 事 18 名(18 年度末 18 名)

監 事 2 名(18 年度末 2 名)

2) 学術評議員 610 名(18 年度末 585 名, 5 月新任 610 名承認)

3) 評議員 88 名(18 年度末 88 名)

2. 会員等

1) 名誉会員 27 名(18 年度末 28 名, 物故者 1 名)

2) 正会員

19 年 3 月末日会員数 15,040 名

19 年度新入会 757 名

退会 -470 名 退会内訳:

会費未納 143 名

希望退会 305 名

物故者 22 名

正会員 現在数 15,767 名(287 名増)

(敬称略, 連絡のあった方のみ)

3) 賛助会員

19 年 3 月末日会員数 38 名

19 年度新入会 3 名

賛助会員 現在数 41 名(3 名増)

3. 物故会員

名誉会員 坂本信夫

正会員 石橋シカ 猪股 彰 宇野弘二
大塚昭男 金井武雄 木戸 博
喜友名進 栗城 篤 坂本美一
櫻井隆弘 武井直之 田中公貴
田中洋一 丹保司平 鵜田佳津子
土用下和宏 樋田哲夫 古河廉一郎
細島弘行 麦田拓実 村田左門
寄崎靖子

3. 委員会報告

1)「糖尿病」編集委員会 委員長 横野浩一

委員会の開催：7 回(平成 19 年 4 月 15 日, 5 月 24 日, 7 月 1 日, 9 月 9 日, 11 月 10 日, 平成 20 年 1 月 20 日, 3 月 20 日)

①出版状況：第 50 巻 4 号から第 51 巻 3 号までの 12 誌とサプルメント 1 として「第 50 回年次学術集会抄録号」を発行。詳細は下表の通り。

(下段：コメディカルコーナー)

②論文受付状況

平成 19 年 4 月 1 日より平成 20 年 3 月 31 日までに新規投稿した論文数は 136 編。

この期間に採否決定した論文数 137 編。そのうち採択可となった論文数 102 編。

	総頁数	原著	症例	報告	受賞 講演	地方会 記録	委員会 報告	編集者 への手紙	会報	特集	追悼文
Vol. 50 No. 4	62	1 2	3			1		1			
Supplement 1	556	第 50 回年次学術集会抄録号									
No. 5	68	2 1	3			1					
No. 6	102	4 1	3			1					
No. 7	124	4	3			1			1		
No. 8	58	4 1	3			1		1			
No. 9	62	4	3					1			
No. 10	60	4 1	3		2						
No. 11	64	5	3				1				
No. 12	84	2 2	5								
Vol. 51 No. 1	98	1 2	5			1			1		
No. 2	94	2 1	2			1					1
No. 3	96	3 1	3	1		1	2	1		1	
合計	1,528	36 12	39 -	1 -	2 -	8 -	3 -	4 -	2 -	-	1 -

採択率は 74%。採択日から掲載までの期間は 3~4 カ月。辞退した論文数 20 編。

③主たる審議・検討事項

- (1)編集委員改選に伴い委員長選出を行い、横野浩一委員を委員長に再選。副委員長に小泉順二委員を指名。
- (2)投稿論文増加のための投稿規定の一部改定
- (3)推敲期間を超過した論文への再投稿通知の徹底
- (4)論文査読のための各学術評議員の専門研究分野の見直し(アンケート調査)
- (5)新編集委員による特集の企画

2)「食品交換表」編集委員会 委員長 石田 均

(1)食品交換表編集委員会は平成 19 年 4 月 22 日(日)、5 月 24 日(木)、10 月 28 日(日)、平成 20 年 3 月 9 日(日)の 4 回開催した。

(2)医学書院「糖尿病ハンドブック 第 2 版」の訴訟について

平成 18 年 5 月 12 日に東京地裁に訴状を提出し、本年 3 月末までに 2 回の口頭弁論と 11 回の弁論準備手続きが行われた。医学書院側は答弁書で、「食品交換表の著作物性に疑義がある」などと主張してきたが、これに対し「食品交換表は日本食品標準成分表のデータを主たる素材とする編集著作物であり、データの選択と配列に創作性を有する」などと反論してきた。本年 2 月、裁判所から和解勧告書が提示され、現在、その内容について原告・被告双方で協議している。

(3)出版事業[19 年 4 月 1 日~20 年 3 月 31 日、()は発行以来の累計部数]

出版事業は順調で、食品交換表の累計出版部数は 210 万部に上った。

食品交換表 第 6 版一売上部数：232,194 部(2,024,735)、発行部数：200,000 部(2,100,000)

糖尿病性腎症の食品交換表 第 2 版一売上部数：8,907 部(68,783)、発行部数：5,000 部(73,000)

糖尿病食事療法指導のてびき 第 2 版一売上部数：2,032 部(13,095)、発行部数：3,000 部(16,000)

食品交換表の英訳版一売上部数：194 部(1,982)、発行部数：500 部(2,500)

CD-ROM 版食品交換表(ver.3)一売上部数：1,163 部(5,911 部)、発行部数：増刷なし(6,500)

CD-ROM 版(ver.2)付糖尿病性腎症の食品交換表一売上部数：270 部(1,497)、発行部数：増刷なし(2,000)

食品交換表 活用編一売上部数：23,573 部

(23,573)、発行部数：30,000 部(30,000)

「食品交換表 活用編」の出版(平成 19 年 5 月)：患者向けの書籍として、当委員会が既に作成している 6 種類の献立集とその応用をイラストで示した。加えて惣菜を利用する場合の考え方や問題点を分かり易く解説した。

(4)引用許可願(19 年 4 月 1 日~20 年 3 月 31 日)

食品交換表(申請 38 件)：無条件許可 15、条件付き許可 15、不許可 2、取り下げ 4、その他 1、審議継続中 1。

3)「治療の手びき」編集委員会 委員長 西沢良記

●本委員会編集書籍である、患者用書籍『糖尿病治療の手びき』および指導者(医師・コメディカル)用書籍『糖尿病療養指導の手びき』は、それぞれ改訂第 54 版を 2006 年 2 月、改訂第 3 版を 2007 年 5 月に刊行している。

●2007 年 5 月 26 日(第 50 回日本糖尿病学会総会会期中)、2008 年 2 月 15 日(第 42 回糖尿病学の進歩会期中)に、それぞれ委員会を開催し、『科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン(改訂第 2 版)』に「メタボリックシンドローム」の内容が追加されたこと、また特定健診の開始等を鑑み、『糖尿病治療の手びき』に「メタボリックシンドローム」の内容を追加することを決定し、現在原稿作成段階である。

●『糖尿病治療の手びき』は第 1 刷(90,000 部)が売れ、現在第 2 刷(30,000 部)販売中で、その在庫切れが予想される 2008 年年内を目途に「メタボリックシンドローム」を追加(追補)したもの(第 3 刷)を刊行する予定である。

●また、『糖尿病治療の手びき』については、今後の①診断基準の見直し、②糖尿病診療ガイドラインの改訂、③インクレチン療法の導入、等を鑑みて 2010 年より改訂に取り組む予定である。

4)小児糖尿病委員会 委員長 雨宮 伸

①『小児・思春期糖尿病管理の手びき(改訂第 2 版)』が 2007 年 5 月 15 日に上梓された。

②ISPAD(国際小児思春期糖尿病学会)から「小児思春期糖尿病ガイドライン」が 2006 年から順次各章ごとに発表されている。このガイドラインはエビデンスに基づいた記載であり、その日本語版は小児内分泌学会が取り組み、日本小児科学会誌に順次掲載している。

③今後の『小児・思春期糖尿病管理の手びき』についても ISPAD にならいエビデンスを明確にしたものを検討する。

④ISPAD の最高功労賞受賞者として 2007 年度は

日本大学名誉教授北川照男先生が選ばれ、ベルリンでの第33回年次集会で表彰された。

⑤日本小児内分泌学会糖尿病委員会編の「こどもの1型糖尿病ガイドブック：患児とその家族のために」が2007年4月に刊行された。

⑥糖尿病協会を中心に IDF Dawn Youth およびキャンプの成果に関する研究が行われている。

⑦1型糖尿病の障害者認定の話題、また小児慢性疾患の特別扶養手当の話題については、本委員会では1型糖尿病患者を身体障害者として扱うことを支援するのではなく、疾患があっても健常者と変わらない生活、差別・偏見のない生活が送れることを支援することを基本とすることを確認した。

⑧〔糖尿病治療ガイド2008-2009〕に小児の糖尿病の記述が加えられた。

5)日本糖尿病協会委員会 委員長 佐々木 敬
世界糖尿病デー記念イベントは、学会と協会がともに関わる IDF 関連行事である。学会が協会との共同でこのイベントを執り行うことに関して協会委員会においても審議した結果、積極的に協力することを決議した。また協会における当該委員会もこれに賛同した。平成19年11月10日に委員会を開催し、世界糖尿病デー記念イベントの各支部における準備状況について確認を行った。

6)選挙管理委員会 委員長 小林 正
委員：柳澤克之 山田憲一 林 洋一 榊原文彦
小川 渉 久保敬二 豊永哲至

例年同様、本委員会は郵便、eメール等を利用して委員会活動を進めていくこととし、従来の申し合わせ通り、理事会推薦の小林正委員を委員長とし、以下の事項を確認した。

(i)20年度会長選挙の手順について

前年度「会長選挙手順」を踏襲し、

・支部からの推薦締切日は平成19年11月15日(木)とする。

・推薦された方の意思確認は11月28日(水)までに事務局必着とする。

・理事長への報告は11月30日(金)までに行う。

・12月2日(日)の定例理事会で、最終候補者3名を決定する。

・候補者の所信のフォーマットは前年度と同様とし、平成20年1月11日(金)を締切日とする。

(ii)候補者の所信が提出され、平成20年1月14日に委員会を開催し、以降の進め方について協議検討した。

1. 会長選出手順およびこれまでの手順についてそ

れぞれ確認した。

2. 所信の確認

3名の候補者から提出された所信について印刷の字体や行間などを検討し調節した。

3. 今後の手順について

所信の手直し終了後に、規則に則り従来の形で理事長への報告、会員への周知、学術評議員への所信の送付等を行うことが確認された。

4. 学術評議員会での投票手順の確認について

①開票作業には、会長候補者のいない支部の委員と、候補者のいない支部の出席した学術評議員の中から委員長が指名した者、委員長を含めて合計8名であった。今回候補者のいない東北支部、近畿支部、および中国・四国支部の学術評議員の中から、3名に依頼することとした。

②昨年と同様に投票用紙配布直前に会場を閉鎖し、回収後開放する。このことは、学術評議員へ候補者の所信を送る際に記載する。

③誤字、姓・名片方の記載でも、候補者の特定が出来れば有効とする。

④最多得票者に決定する。同数の場合は学会入会年月の早い者とする。(今回の候補者はそれぞれ入会時期が異なるため、一回の投票のみで決定となることを確認した。)

⑤各候補者の得票数は公表する。

⑥迅速に開票作業を行うため、投票用紙を折り曲げて投票する場合は「二つ折りまで」とすることを注意事項として通達する。

以上は、議場で予め公表する。

7)「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

委員長 門脇 孝

第42回「糖尿病学の進歩」に向けてのプログラム委員会を平成19年5月20日に開催した。第41回「糖尿病学の進歩」の開催報告を受けて種々検討し、今後はPost Graduateを重視してプログラムを作成することを確認した。また、講演記録について、パワーポイントの内容のCD-ROM化による出版を今後検討することとした。

また、第43回「糖尿病学の進歩」に向けてのプログラム委員会は平成20年5月12日に開催した。

8)内科系学会社会保険連合

委員 渥美義仁

委員 河盛隆造、加来浩平、渥美義仁

昨年、平成20年度診療報酬改訂に向け内保連を主に通して厚生労働省に対して、以下の項目を要望した。糖尿病治療の根幹である管理栄養士による栄養指導管理料の適正な評価と回数制限の緩和。IDFのガ

イドラインで標準ケアとされている非インスリン使用例での血糖自己測定の実現、血糖コントロール不良例に対するグリコアルブミンの制限緩和、今回、糖尿病学会の要望は、後期高齢者医療制度での管理栄養士による栄養・食事指導の評価、生活習慣病管理料と合わせた中での非インスリン使用者への血糖自己測定、1型糖尿病と薬物治療変更後6カ月のグリコアルブミン測定の制限緩和、として一定の成果を得ることができた。他に、多くの学会員のサポートがあって専門医の指示に基づく専門看護師のフットケアが糖尿病合併症管理料として新設された。今後、今回認められた項目の有効性を示すことと、更なる評価を目指して学会員の協力をお願いしたい。

9) 日本医学会に関する報告 評議員 春日雅人

平成20年2月20日に第75回定例評議員会が開催された。役員改選が行われ会長に高久史磨先生、副会長に岸本忠三先生、久道茂先生、矢崎義雄先生が選出された。また、日本肥満学会、日本血栓止血学会、日本血管外科学会の新規加盟が承認された。

10) 国際交流に関する報告 理事 清野 裕

1. IDF 理事会報告

堀田 IDF 副会長、清野理事が出席。以下の点が検討された。

- ・ウィーンにおいて2007年5月6～7日に開催された。昨年のIDF会議(ケープタウン)の総括のなかでこの会議が大変な成功であったこと、アフリカという途上国で糖尿病に対する関心が高まったことを受けて、2009年10月18～22日のモンテリオールの次は、2年後開催とする。

- ・IDF 提案の国連決議が採択されたことから、World Diabetes Day を盛り上げるイベントを各国で行なう。とくにメディアを利用する。

- ・IDF 総会を World Diabetes Congress と改称する。

- ・2011年のCongressはドバイで開催する。(他に候補はアブダビ、シンガポール)それ以降の開催は2年毎、毎年。ADA, EASD とは会の性格が異なるので、十分やっていける。

- ・Translational Research(疫学、教育など)fund を設立して公募。

- ・各国の投票数についての改定案を郵送投票にて行った。

2. IDF-WPR Council Meeting

香港において2007年9月7～8日に開催され、日本から6名出席。以下の点が討論された。

- ・国連決議以降の活動について

WPR での重要課題として教育プログラムの推進が挙げられ、地域での教育システムの標準化、各国の言語や背景に対応した資料の整備、トレーナー教育プログラムの整備などが課題とされた。また、各国に窓口となる教育指導者を置くことが求められた。

外国への支援については、自国が必要としている、または提供できる支援内容を明確にするため、各国間においてより密接な関係を構築する努力が求められた。

会議の旅費について、資金繰りに苦慮する南方の島国の代表者が会議に出席できるよう支援が求められた。これに関する資金の調達及び分配方法については今後協議していく。

- ・Diabetes Research & Clinical Practice の発行について

IDF-WPR の正式な出版物として承認されているものの、IDF と出版社である Elsevier との間で新たな契約を締結。Elsevier としては WPR との連携は保つものの IDF 全体に拡大したい意向。

- ・WPR コンgressの今後について

現在3年ごとに行われているコンgressを2年ごととする案が出された。スポンサーの確保、渡航の困難さ、発表資料の作成などから見直しを求める声があった一方、一般へのインパクトの観点から2年ごとが望ましいとの意見もあり、今後慎重に議論を進めて開催頻度を決定するとした。

3. IDF-WPR Executive Meeting, Council Meeting 2008

日時: Executive Meeting 3月28日(金) Council Meeting 3月29-30日(土、日)

場所: Duxton Hotel Wellington NZ

出席(日本): 清野裕 (IDF-WPR Chair-Elect), 堀田饒 (IDF Vice-President), 田嶋尚子 (IDF-WPR Executive), 伊藤千賀子 (delegate), 中村直登 (delegate)

会議では、昨年の世界糖尿病デーが糖尿病撲滅の第一歩として成功を取めたことを受け、具体的な成果を得るための今年の事業展開について議論した。2008年のWPR重点活動目標は、①糖尿病教育の実施、②糖尿病の知識啓発、③糖尿病に関する国連決議とWPDD (Western Pacific Diabetes Declaration) の実行、④WPRの糖尿病関連団体の発展となった。

主な議事内容

(1) WPDD Action Plan

内容への理解が薄れたことから、WPDD=Western Pacific Diabetes Declaration (WPRの活動スローガン)であることを確認。実現に向けた活動を検討した。

(2) DRCP (Diabetes Research and Clinical Practice)

出版契約

Elsevier 社(英)と IDF が「DRCP」の出版契約を締結した。今後も編集権は WPR が保持し、従来の方針を堅持することを確認した。

(3) Diabetes Education

地域内の糖尿病教育活動について、実施内容を検討。各国から推薦された医療者で構成するワーキンググループを組織し、糖尿病患者教育プログラム実施への協力や、糖尿病教育に携わるコメディカルスタッフ育成を担当する。

(4) Fund Raising

発展途上国の組織に WPR Council Meeting への旅費を提供し、WPR の活性化を図る。今回の IDF-WPR Congress で資金集めに成功した NZ 糖尿病協会に枠組作りを依頼した。

(5) TWINNING

地域間格差を埋める目的を持つ先進国と発展途上国の組織間連携。今後、donor と recipient をそれぞれ募る。

(6) WPR Parliamentary Meeting

NZ 糖尿病協会が、国会議員で構成する WPR の糖尿病対策議員連盟の結成に成功。発足会議を 4 月 1 日に NZ 国会で開催した。

(7) IDF Congress, IDF-WPR Congress の開催

IDF Congress Committee による regional congress 掌握案が IDF 本体から提案されたが、WPR は過去の実績に鑑み、同案の受入れについての合意形成を先送りした。また、投票により次回の WPR Congress は韓国(釜山)での開催を決定した。

※ 2009 年：IDF Congress(モントリオール)、2010 年：IDF-WPR Congress(釜山)

2011 年：IDF Congress(ドバイ)

・ APDEC2008 について

2008 年 8 月 23～30 日に東京で開催予定である。

・ 各国が保有する投票数について

現在は各団体の会員数に比例した投票数が与えられているが、香港のように人口は少ないが影響力のある国、逆に中国のように人口は多いが積極的な活動が見られない国があるため、今後考慮してゆく必要があるとした。

・ 国際糖尿病連合(IDF)に関する報告

IDF Vice President 堀田 饒

2007 年の国際糖尿病連合(IDF)の理事会は、IDF-WPR の会合を除いて下記の 2 回が開催された。2007 年 5 月にオーストリアのウィーン、12 月にアラブ首長国連邦のドバイである。いずれの会合に於いても、IDF の今後の活動方針とその現況の報告であったが、発展途上国への対応が中心である。そんな中で、新し

い試みとして臨床研究助成の公募がなされた。また、2006 年 12 月の国連での「糖尿病に関する決議」採択を受け、2007 年 11 月 14 日の第 1 回「世界糖尿病デー」に向けた各国の取り組みが報告された。世界糖尿病学会は、2009 年にモントリオール、2011 年にドバイが決定し、以降は毎年開催されることとなった。

2007 年 11 月 13～15 日、ニューヨークで国連の定めた「世界糖尿病デー」を祝う行事が、国連ビルを中心に盛大に開催された。我が国の提唱したブルーライトアップ作戦は、東京タワー、ニューヨーク・エンパイアステートビルをはじめ、世界で 240カ所に及び、その効果は大であった。因みに、IDF への加盟国は 170 カ国、200 団体である。

11) 学術調査研究・教育に関する報告

理事 門脇 孝

3 件の申請について審査を行い、「劇症 1 型糖尿病の原因解明と治療法の開発」と「緩徐進行 1 型糖尿病の病態解析および診断基準の作成」の 2 つの研究は、内容がいずれも 1 型糖尿病に関するものであり、大部分のメンバーが重複していることから、統合して「1 型糖尿病の調査研究」として採用することとした。他の 1 件については問題点を修正し再提出するよう要望している。

(1) 糖尿病性神経障害の実態調査と国際比較調査研究委員会(開始：2003 年 5 月 13 日)

委員長 堀田 饒

委員：渥美義仁、岩本安彦、大野良之、佐々木秀行、中村二郎、馬場正之、安田 斎

「糖尿病における合併症の実態把握とその治療に関するデータベース構築による大規模前向き研究(JDCP Study)」がスタートされたのを受けて、JDCP Study 参加施設に対して登録症例の一部により詳細な神経機能調査を依頼する予定である。現在、調査用紙および検査マニュアルを作成中である。

(2) 妊娠糖尿病の定義・スクリーニング、診断基準の再評価に関する調査研究委員会(開始：2003 年 10 月 5 日)

委員長 豊田長康

委員：岩本安彦、河盛隆造、折笠秀樹、伊藤千賀子、穴澤園子、佐中真由実、和栗雅子、平松祐司、鮫島 浩、三田尾 賢、安日一郎、杉山 隆

妊娠糖尿病(gestational diabetes mellitus:GDM)は、各種の母体および胎児・新生児合併症(周産期合併症)を生じること、たとえ分娩後にいったん耐糖能が正常化しても将来糖尿病に進展する可能性が高いこと、また、最近では胎児期の子宮内環境や新生児期の

異常が、小児期や成人期の代謝性疾患(肥満、糖尿病、高血圧等)の原因になりうるということが示唆されていることから、その早期発見に努め、妊娠中から適切な治療・管理を行う必要がある。GDM の定義、診断基準、スクリーニング法という基本的事項について、EBM に基づいた観点から、また、国際的な指針との整合性も考慮しつつ、わが国において共通認識を確立する必要があることから、本調査委員会は現時点における再評価を行った。

ただし、当初、GDM の診断基準に関する国際的な無作為比較試験(Hyperglycemia and Adverse Pregnancy Outcome Study: HAPO Study)の結果は、本年 6 月に詳細に報告され、討議される予定である。したがって、HAPO study の結果が本調査研究期間中に公表されることを期待していたが、本報告書の期限までに間に合わない。したがって、その結果が公表された暁には、わが国の GDM の定義、スクリーニング、診断基準について、改めて見直す作業が必要である。このような経緯から、本調査研究委員会の報告としては、現在までの主要な問題点を整理することにより、HAPO Study の結果公表後の見直し作業をする際の参考資料としての位置づけになると考え、委員会報告書としてまとめ、糖尿病学会雑誌に掲載予定である。

現時点では、GDM の定義、スクリーニング、診断基準については現行のものをを用いることが混乱を招かない方法と考えた。今後、HAPO Study の結果が公表されると、国際的な GDM の定義、スクリーニング、診断基準のいずれも見直される可能性がある。その際には日本糖尿病学会においても、再度調査研究委員会を立ち上げ、わが国の GDM の定義、スクリーニング、診断基準を再検討する必要がある。

(3)日本人におけるインスリン分泌とインスリン抵抗性に関する実態調査研究委員会(開始:2004 年 7 月 19 日) 委員長 清野 裕

本委員会は日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態を調査し、それぞれを評価するための検査法や結果の解析法を確立するとともに、今後標準的な評価法を提唱するため設置された。すでに 18 名の委員が、それぞれの施設における調査経過の報告を終えた。2007 年 1 月にはシンポジウムを開催し、海外から本研究テーマに精通する研究者 2 名を招いて講演を依頼した。Prof. Michael Nauck は「The role of incretins for insulin secretion in healthy, prediabetic and type 2 diabetic subjects」、Prof. Wilfred Y. Fujimoto は「Lifestyle-Related Disorders in Japanese: Obesity, Type 2 Diabetes, and the Metabolic Syndrome」のタイトルで講演が行われ、活発な議論がなされた。

「グルコースクランプ」、「ミニマルモデル」、「グルカゴン負荷試験」、「経口糖負荷試験」、「体脂肪分布」、「アディポネクチン、プロインスリン、炎症関連因子」の各セッションでも活発な討議が行われるとともに、海外の研究結果とわが国の研究結果を比較することで、日本人におけるインスリン分泌能とインスリン抵抗性に関する特徴についての検討がなされた。

また各施設からのデータを収集し、経口糖負荷試験では 20,000 例、グルコースクランプでは 700 例、ミニマルモデルでは 500 例、グルカゴン負荷試験では 1,000 例を超えるデータが集積され、議論を重ねながら最終的に全国的なレベルで多数例の解析を行い、実態に沿った基準の提案を行う。参加者から得られたデータを専門のシステムエンジニアとともにデータベース化し、多数例の集計成績を構築するとともに、客観的で精度の高い解析を行っている。北から南まで全国レベルで、多くの施設からのデータを、多数例について集積して、日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態解明が可能となっている。

(4)若年発症 2 型糖尿病の実態に関する予備的調査研究委員会(開始:2006 年 5 月 24 日)

委員長 岩本安彦

本委員会は、予備的調査研究として発足したが、その後厚生科学研究費を得て、平成 19 年度から厚生科学研究として発展的に継続していくこととなった。本委員会の 1 年間の活動内容については、委員会報告として「糖尿病」に掲載した。

(5)糖尿病・糖代謝異常に関する診断基準検討委員会(開始:2006 年 9 月 29 日) 委員長 門脇 孝

2007 年 6 月 17 日に第二回委員会を開催し、空腹時血糖値に関する診断基準について、わが国におけるエビデンスのプレゼンテーションとそれに基づく集中的な討議を行った。その結果、空腹時血糖値 100-109 mg/dl を正常高値として扱うことで一致した。その上で 10 月 8 日に第三回委員会を門脇委員長と山内委員(幹事)で開催し、現行の診断基準策定の委員長であった葛谷健先生に第一回、第二回の委員会の検討結果を御報告し、御意見を伺った。その際、委員会の結論については全面的に御賛同頂き、更に(1)空腹時血糖値の正常型と境界型を分けるカットオフ値に関して、委員会の議論によってコンセンサスが得られたと考えられたことを現委員会の報告として先ず学会誌「糖尿病」に掲載すること、(2)その後、それを受ける形で前回の委員会報告(1999)に小改訂を加えたものを学会誌「糖尿病」に掲載する、という進め方を御提案頂いた。

理事会の承認を受け、「糖尿病」Vol. 51 No. 3 に委員会報告を掲載した。

(6) 糖尿病関連検査の標準化に関する調査検討委員会

Committee on the standardization of diabetes-related laboratory testing(開始：2007 年 8 月 19 日)

委員長 柏木厚典

委員：門脇 孝，名和田新，羽田勝計，伊藤博史，富永真琴，及川眞一，野田光彦，河村孝彦，三家登喜夫，難波光義，柱本 満，笹原誉之，武井 泉(日本臨床検査医学会)，梅本雅夫(日本臨床化学会)，桑克彦(日本臨床検査標準協議会(JCCLS))，村上正巳(日本臨床検査自動化学会)，小栗孝志(日本臨床衛生検査技師会)，委員会事務局 西尾善彦(順不同，敬称略)

本委員会は 1993 年に GHb 標準化に関する委員会として発足し，1998 年に糖尿病関連検査の標準化に関する委員会に引き継がれ，ヘモグロビン A1c の標準化，精度管理に大きな役割を果たしてきた。HbA1c の国際標準化について米国糖尿病学会，ヨーロッパ糖尿病学会，国際臨床化学連合(IFCC)，国際糖尿病連合から合同のコンセンサス・ステイトメントが出され世界的にその対応が討議されている。そこで本委員会は，今回特に重要な検討課題として我が国における本問題に対する日本糖尿病学会としての対応に焦点を絞って議論することとなった。

H19.8.19：第 1 回委員会

H19.10.30：第 2 回委員会

H19.11.6：IFCC 主催の HbA1c 国際標準化に関するシンポジウムへ委員長が参加

H19.12.3：日本糖尿病学会理事会での討議

H20.2.6：第 3 回委員会(他関連他委員との合同委員会)

H20.2.14：日本糖尿病学会臨時理事会での討議

H20.5.21：日本糖尿病学会定例理事会，評議委員会，総会での討議予定

H20.5.23：第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会でのワークショップに取り上げる。

現在までの決定事項

1. HbA1c はヘモグロビン β 鎖 N 末端のバリンの糖化された量として定義し，標準化を進める。
2. その際機器の標準化は IFCC 法を基準とするが，HbA1c 測定の際には，我国の HbA1c 標準物質である日本臨床検査標準協議会 JCCLS(Japanese Committee for Clinical Laboratory Standard) から出された実試料標準物質 JCCLS CRM004a(JDS Lot 3)にトレースできる標準物

質を用いて測定し，JDS 値(%)を求める。一方 JDS 値と IFCC 測定値の比較を行ない，その IFCC-JDS 関係式から IFCC 値(mmol/mol)を求める。

3. 当面臨床上の混乱を回避する目的で，臨床報告，学会発表，論文発表には JDS 値と IFCC 値を併記し，日常診療ではこれまで用いた JDS 値を用いて血糖管理の指標とする。
4. 上記のごとく HbA1c 測定の標準化をはかることによって，患者，医療関係者，測定機器会社など現場の混乱を回避し，HbA1c の国際標準化にむけて体制の整備をする。

(7) 糖尿病運動療法・運動処方確立のための調査研究委員会(開始：2007 年 7 月 16 日)

委員長 佐藤祐造

本調査研究委員会を平成 19 年 7 月 16 日と 12 月 25 日の 2 回，東京ステーションコンファレンスにて開催した。

本調査研究委員会設置の趣旨：我国における糖尿病運動療法の現状を把握する。また，可能であれば介入研究をも実施し，糖尿病患者の運動処方の確立に向けて調査研究を推進し，「糖尿病」に本調査研究委員会報告として「糖尿病運動処方ガイドライン」(仮称)を掲載する。さらに，国外にも発表しうるエビデンスが得られた場合には，外国雑誌にも投稿を目指す。

① 調査委員会委員：出席委員以外にも，学会員および他団体(理学療法士，健康運動指導士等)からの推薦を受け入れる等委員補充の可能性について検討したが，当面は当初のメンバーで活動を開始し，適宜委員の追加を行うこととした。

② 我国における糖尿病運動療法の現状に関するアンケート調査：糖尿病運動療法実施状況に関して，糖尿病専門医 600 名，専門医以外の内科医 600 名，両群合計 1,200 名を対象に文書によるアンケート調査を実施する。後者の非専門医に関しては，日本医師会今村聡常任理事へ事前説明後，平成 20 年 2 月 5 日付で書面依頼を行い，3 月 28 日付で唐澤祥人会長より，アンケート実施に関して，共同企画の形式で了承との連絡を受けた。調査対象者の抽出にあたっては，地域毎の糖尿病患者数(人口比)，開業医と勤務医の比率等も考慮に入れる。調査項目は糖尿病専門外来および教育入院実施の有無，糖尿病治療内容，食事療法と運動療法指導の実施状況・体制等に関して，専門医と非専門医の診療内容の比較を行う。調査アンケートに，各医療施設についての調査内容も含める。

以上の点に関して，4 月 3 日付で日本糖尿病学会倫理委員会へ審査を申請した。

③ 今後のスケジュール：アンケート用紙，依頼文に関して，日本医師会と最終調整中．倫理委員会の認可が得られれば，アンケート用紙を送付予定．

(8)1 型糖尿病に関する調査研究委員会(開始：2007 年 12 月 23 日)

共同委員長：小林哲郎

共同委員長：花房俊昭

・劇症および急性発症 1 型糖尿病分科会(花房俊昭)

劇症 1 型糖尿病発症時に肝機能障害が高率に認められることを明らかにした(Takaïke H et al. Ann Med, In press)．次に，年齢別・性別の臨床的特徴を検討し，小児の発症が少ないこと，妊娠に合併して発症する患者を除けば，年齢・性による差が少ないことを明らかにした(英文論文投稿中)．第 3 に発症時患者血清においてウイルス抗体価を測定し，一部の患者で有意な抗体価の上昇を認め，複数のウイルス抗体価の上昇を認めた患者も存在したが，特定のウイルス抗体価の上昇は認めないことを明らかにした(和文論文投稿中)．最後に，IA-2 抗体単独陽性 1 型糖尿病，インスリン注射を契機に 2 型糖尿病より 1 型糖尿病に移行した症例の解析を進めている．今後の疫学調査検討課題としては，劇症 1 型糖尿病死亡例・心停止例，2 型糖尿病合併劇症 1 型糖尿病例，インターフェロン投与後発症 1 型糖尿病例の調査，急性発症典型例診断基準の作成があげられる．

・緩徐進行 1 型糖尿病分科会(小林哲郎)

委員会施設における糖尿病発症 5 年以内の多施設間前向き検討：現在まで 599 検体を集積し，“2 型糖尿病”中に約 10% の睥島抗体(GAD 抗体 and/or IA-2 抗体 and/or IAA)陽性例を認めた．GAD 抗体陽性率は他の抗体と比べて有意に高頻度であった．今後さらに症例数を増やすとともに，その自然経過の前向き観察を行っていく．全国調査：現在まで 36 施設の登録を受けている．さらに登録を増やし緩徐進行 1 型糖尿病の実態を明らかにし，診断基準の作成に役立てたい．

・1 型糖尿病のゲノム解析(池上博司)

1 型糖尿病の各サブタイプにおける遺伝素因を解明する目的で，疾患感受性遺伝子の網羅的解析を進めている．まず，HLA 領域ならびに非 HLA 領域の候補遺伝子約 270 に関して，一塩基多型(SNP)の遺伝子型を 1 型糖尿病の各サブタイプ(急性発症典型例約 400 例，緩徐進行 1 型糖尿病約 100 例，劇症 1 型糖尿病約 100 例)ならびに健常対照者約 250 例を対象として解析センター(東京大学人類遺伝学教室)にてタイピングした結果，サブタイプ間で共通して疾患と関連を示す遺伝子とサブタイプ毎に関連の異なる遺伝子が存在することが明らかとなった．さらに密な SNP を用いた

ゲノムワイドのアソシエーションスタディ(GWAS)を進めるため，急性発症 1 型糖尿病，緩徐進行 1 型糖尿病，劇症 1 型糖尿病の各サブタイプに関して病型診断の確実な症例の集積を進めるとともに，解析センター(東京大学人類遺伝学教室)にて一次スクリーニングを開始した．

12)平成 20 年度坂口賞および学会賞に関する報告

1)坂口賞は，泉寛治氏，奥山牧夫氏に授与する．

2)学会賞審査委員会(委員長 清野 裕)を平成 20 年 1 月 14 日に開催し，各受賞者を選出した．

①平成 20 年度ハーゲドーン賞

岡 芳知(東北大学大学院医学系研究科分子代謝病態学分野)

「2 型糖尿病の統合的理解に向けた分子機構の解析」

②リリー賞

i 窪田直人(東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科)

「遺伝子改変マウス作製による 2 型糖尿病の分子メカニズムの解明」

ii 西川武志(熊本大学大学院医学薬学研究部代謝内科学)

「糖尿病および糖尿病合併症の新規発症機構の解明-ミトコンドリア由来活性酸素の関与-」

13)学会認定事業に関する報告

(1)専門医認定委員会 委員長 清野 裕

委員会は小委員会も含め 8 回開催された．平成 19 年度の専門医試験は 339 名が受験し，249 名が合格した．研修指導医は 81 名(随時審査も含む)，認定教育施設は 37 施設(無床 2 施設含む)が認定された．更新は専門医 480 名・指導医 180 名・認定教育施設 61 施設であった．研修指導医の申請の際必須である論文について，特定の薬剤・機器の有用性に関する論文，市販後の有効性・安全性などに関する論文は業績として認めないこととした．学会事業協力の一環として，専門医へ専門医認定委員会名でデータベース構築委員会への協力依頼をした．

現在，研修指導医・専門医研修の常勤の規定について検討を行なっている．

(2)専門医試験委員会 委員長 荒木栄一

平成 19 年 5 月 25 日，第 26 回試験委員会を開催し，第 18 回専門医試験の試験方法と出題問題の作成分担，口頭試験担当者，試験監督担当者を決めた．7 月 29 日に委員長，数名の委員により試験問題のチェックを行い，9 月 24 日に委員全員で試験問題の選定を行っ

た。第18回専門医試験は、平成19年10月28日、都市センターにおいて実施した。受験者には事前に一部出題範囲・面接での評価について公表し、マークシート方式での実施となった。受験者は339名で、11月10日に合否判定案を決定、11月18日専門医認定委員会に報告、249名の合格(合格率73%)が承認された。希望のあった受験者に対し、成績の開示を行なった。

第19回(平成20年度)の試験は平成20年10月19日(日)東京国際フォーラムで、第20回(平成21年度)の試験は平成21年10月25日(日)東京国際フォーラムでの実施を予定している。

14) 学会設立50周年記念事業に関する報告

理事長 春日雅人

(1) 記念誌委員会 委員長 清野 裕
委員：葛谷 健、島田 朗、寺内康夫、山田祐一郎
ワーキンググループ：大原 毅、高本偉碩、長坂昌一郎、藤本新平、船江修(第3回委員会から)

「糖尿病学の変遷を見つめて：日本糖尿病学会50年の歴史」(仮題)は、2008年5月発行予定で作業を進めたが、一部の項目に大幅な遅れがあり、今秋発行となる。各項目についての3月末日現在の進行状況は、以下の通り。

(i) グラビア

- ・11月10日11日開催の「学会設立50周年記念式典」の会場に、本コーナー“写真でみる「日本糖尿病学会」の50年”をパネル展示した。これはその時点で掲載予定の写真を使用しレイアウトしたものである。
- ・「学会設立50周年記念式典」の様子を撮影し、追加掲載。

(ii) 年表

- ・内容は、編集委員会の確認を経て確定し、レイアウト済み。

(iii) 日本糖尿病学会の歩み

- ・全章とも著者校正済み。
- ・今後、編集部および編集委員会の最終確認を経て、2月末に編集作業を終了した。

(iv) TOPICS

- ・全12本の進行状況は以下の通り。
9本：著者校正済み 3本：編集委員会にて原稿内容確認中。

(v) 座談会：新たな50年を見据えて—糖尿病学の今後の展望

- ・出席者全員による著者校正済み。
- ・今後、編集部および編集委員会の最終確認を経て、2月末に編集作業を終了。

(vi) データで見る日本の糖尿病学

- ・内容を編集委員会にて検討し、2008年1月中旬に最終版を作成、2月末に編集作業を終了。

(vii) 日本糖尿病学会の歴史について

- ・一部は編集委員会にて確認。一部は事務局およびエディットにて作成。作成後、編集委員会にて検討し、2008年1月中旬に最終版として確定し、2月末に編集作業を終了。

コラム「学会の50年に想いを寄せて」

- ・全5本、著者校正済み。
- ・編集部および編集委員会の最終確認を経て、2月末に編集作業を終了。

(viii) 座談会：日本糖尿病学会設立50周年記念誌作成にあたって—糖尿病学の50年をどう切り取ったか

- ・出席者全員による著者校閲済み。

(2) 記念式典委員会

委員長 岩本安彦

平成19年8月19日(日)、10月27日(土)に式典・シンポジウム合同委員会を開催し、全体の最終打ち合わせを行い、記念式典のプログラムの印刷、永年功労者への記念品、シンポジウム招待演者との交歓会等について検討した。

11月10日(土)当日は、文部科学省、厚生労働省、関連各団体の来賓の臨席および祝電を賜り、プログラムに沿って滞りなく式典が執り行われた。式典に引き続き記念講演会が開かれ、小坂樹徳名誉会員、Silink教授(IDF会長)およびKahn教授(米国、Joslin Diabetes Center)より特別講演が行われた。なお、永年功労会員は40名中、25名がご出席され、全体で式典258名、祝賀会197名の参加者があった。

(3) 記念シンポジウム委員会

委員長 小林 正

平成19年11月11日(日)9:00-18:00、東京国際フォーラム、ホールC会場にて、10人の海外からの招待講演演者を迎え、現在の糖尿病学のトピックス、レビューなどの講演のあと、約1時間30分糖尿病学の研究の方向性、糖尿病対策のあり方、若い糖尿病研究者や専門医の養成のあり方、国際連合の対糖尿病対策決議を受けての各国での対策のあり方などについて、講演者全員と日本側の司会者5人によるパネルディスカッションを行った。

これらは英語で行い、同時通訳を付け、参加費として2,000円を徴収した。招待講演者として、Graeme I Bell, John A Todd, Jaakko Tuomilehto, Steven M Haffner, C Ronald Kahn, George L King, Knut Borch-Jonsen, Michael Brownlee, David Kelley, Martin Silink (IDF会長)、日本側から春日理事長が講演した。

これからのすべき研究(遺伝子と環境の関係)、合併

症の予防における重要な研究, 若い MD の研究者のリクルートのありかた, 行政に対する働きかけなど多くの建設的で網羅的な発言を頂き成功裏に終了した。

第一線での著名な糖尿病に関係する学者を迎え, 約 350 名の参加を得, 会場からの多くの討論もあり成功裏に終わった。このシンポジウムの模様は, 学会 HP で公開し会員に見ていただく予定である。また, パネルディスカッションでも研究の方向性や若い研究者をどのように糖尿病研究に導くかなどについても意義深い内容であったので, 広く会員にお読みいただくため印刷することを計画している。

15) 分科会に関する報告

日本糖尿病合併症学会 齋藤 康

日本糖尿病学会の分科会である日本糖尿病合併症学会は, 平成 19 年 10 月 26, 27 日の 2 日間に亘って山田信博会長(筑波大学内分分泌代謝・糖尿病内科教授)の下, 第 22 回日本糖尿病合併症学会としてつくば市のつくば国際会議場「エポカルつくば」にて開催された。

学会は, シンポジウム 6 題, そして一般演題は例年通り全てワーク・ショップ形式で行われた。市民公開講座も 10 月 27 日に開催された。本学会が設けた学会賞各賞の受賞者は以下の各先生で, Outstanding Foreign Investigator Award は Rury Holman 先生(Oxford Centre for Diabetes, Endocrinology and Metabolism, University of Oxford), Distinguished Investigator Award は堀田 饒先生(中部ろうさい病院), 堺 秀人先生(神奈川県病院事業庁), Expert Investigator Award は山本 博先生(金沢大学大学院・血管分子生物学), Young Investigator Award は塚本和久先生(東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科)に贈呈され, 受賞講演が行われた。

平成 20 年に予定されている第 23 回日本糖尿病合併症学会は, 岩本安彦会長(東京女子医科大学糖尿病センター)の下, 10 月 3, 4 日の 2 日間にわたって都市センターホテルを会場として開催されることが決定している。学会の機関誌「糖尿病合併症」は抄録号を含め 3 回発行された。

16) 糖尿病総合対策への取り組みに関する報告

(1)「対糖尿病戦略 5 ヶ年計画」作成委員会

委員長 門脇 孝

2007 年 4 月 18 日に開催された新健康フロンティア戦略賢人会議においても糖尿病対策が一つの大きな柱となっており, 最近の糖尿病の状況もふまえて「対糖尿病戦略 5 ヶ年計画」を改訂し学会ホームページにアップする予定である。

(2)「健康日本 21」の糖尿病対策委員会

委員長 伊藤千賀子

(i) 委員会開催: 平成 19 年 12 月 16 日, 平成 20 年 3 月 20 日(通算 13, 14 回)に開催した。主な討議内容は 1) 日本糖尿病対策推進会議のワーキンググループで作成した推進会議の活動を評価のためのアンケートについて検討した。内容の一部を若干修正して糖尿病専門医の 10%, 300 人にお願いすることとした。専門医と一般医に共通なアンケートとすることの是非はあるが, 両者を比較して問題点を明らかにして今後の対策に役立てるために行うこととした。2) 糖尿病対策推進会議の委員が利用できる日本糖尿病対策推進会議の経緯や糖尿病予防・治療に関する啓発スライドを作成した。内容は「糖尿病治療のエッセンス 2007」に沿ったものであるが, 一部には必要なデータを追加して, 更に分かりやすいスライドとした。

(ii) 日本糖尿病対策推進会議の動向

平成 19 年 8 月 8 日と平成 20 年 2 月 27 日に日本医師会館で日本糖尿病対策推進会議の幹事会が開催された。8 月には日本歯科医師会が正式に推進会議に加入し, 2 月には健康保険連合会と国民保険中央会が参加することが承認された。

(iii) 日本糖尿病対策推進会議の活動(平成 19 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月 31 日)

幹事会開催: 幹事会は平成 19 年 8 月 8 日と平成 20 年 2 月 27 日に開催され, 1) 日本歯科医師会を日本糖尿病対策推進会議の正式なメンバーとした。これは各地域の活動にも加わることとなった。2) 日本糖尿病対策推進会議の活動内容の再確認と地域への組織的な活動を強化する方法について討議された。3) インスリン治療を加えた「糖尿病治療のエッセンス 2007」が発行された。4) 日本医師会が各都道府県の推進会議設置状況調査を行った。日本糖尿病対策推進会議が設置された平成 17 年には組織率は 55.3% に過ぎなかったが, 平成 18 年には 74.5% に上昇し, 平成 19 年 9 月には 100% となった。推進会議が設置されても全ての地域で十分な活動が行われているわけではなく, 地域の特徴を生かした真に有効な糖尿病対策推進会議に育てる必要がある。

(3) 糖尿病データベースの構築委員会

委員長 小林 正

現在日本での糖尿病患者の合併症に関する実態はまだ明確に把握されていない。本研究は糖尿病患者 1 万症例のデータベース構築には追跡情報を含め, 出来るだけこれからの大規模前向きのコホート研究などの標

準的なものになるように、日本糖尿病学会、日本腎臓学会、日本糖尿病眼学会、日本歯周病学会の4学会の専門家の総力をあげて、ベストとなるプロトコルを構築し、現在の日本で大きな問題となっている糖尿病の実態の調査、および治療のあり方に十分な資料となるデータの収集を行うことを主眼としている。対照となる患者は十分な検査が行える大学病院、基幹病院が主となるが、一部、糖尿病患者の多い診療所なども含み、また歯周病に関しては、歯科の存在する施設で、追跡することになる。失明の原因となる網膜症の追跡には、眼科専門医の所見を含み、可能であれば眼底4方向の写真も含み、国際的にも通用するデータの収集を行う。糖尿病学会および腎臓学会の指導医などにアンケート調査を行った結果、合計12,000例(目標10,000例)の登録が可能と判明した。40歳以上75歳までの糖尿病患者を対象とし、各合併症のエンドポイントを設定し、5年間データを収集する。追跡項目については、アンケートの結果、可及的に入力を容易に出来るように簡素化することにした。現在の疫学研究に関する倫理指針に沿った手続きをとる必要があり、糖尿病学会の倫理委員会にて審議し、また研究者の属する大学などの倫理委員会にての審議のうえ、調査研究を始める。全国の種々の施設における異なった治療法によりどのように、腎症、網膜症、神経障害という細小血管障害から心血管障害、脳血管障害などの大血管障害にいたる合併症を抑制しているか、またこれらの患者の長期の追跡により糖尿病患者の死因調査も施行し、現在の日本における糖尿病の実態を明らかにすることは糖尿病の管理・治療のあり方を考える時必要である。特に、日本人の糖尿病網膜症などによる失明、歯周病の実態のデータなども乏しく大規模な日本におけるこのような研究は必要である。これにより適切な治療法のガイドラインの基礎となるデータや糖尿病治療の医療費のあり方に関する基礎的資料が得られる。欧米ではこのような臨床データが多く報告されているが、日本では極めて乏しくこの研究を遂行する必要性は高く、日本糖尿病学会および日本腎臓学会、日本糖尿病眼学会および日本歯周病学会が中心となってこれを遂行する意義は大きい。去年から登録を開始したが、参加を表明する医師の数はアンケートの結果と反して、参加者の数は不十分であり、ニュースレターなどで参加を呼びかけ、また理事会で学会の教育認定施設での参加を強く求めるべきであるとして、手紙で各専門医に参加を呼びかけ、最近では5,000症例に近づき、参加医師が予定の症例数を完成すると13,000症例になるものと考えられ、さらに継続的に登録促進を訴え、学会でのブース、スライドでの宣伝等で現在研究を進めている。4学会が協力して行う、この糖尿

病患者のデータベースは重要で意義ある研究であり、また標準化された追跡情報の確立にも貢献することも考えられ、学会を挙げてこの研究の完成を期待したい。登録は一応平成20年6月末を締め切りとしている。

17) 各種委員会

(1) 糖尿病治療ガイド編集委員会 委員長 岩本安彦
委員：荒木栄一、今村 聡、岩本安彦、柏木厚典、門脇 孝、貴田岡正史、田嶋尚子、南條輝志男

委員会開催5回：平成19年4月7日(於：大阪)、6月16日(於：東京)、10月1日(於：東京)、10月6日(於：京都)、平成20年1月7日(於：東京)

① 理事会決定に基づき、昨年度以来「糖尿病治療ガイド2006-2007」の英文版刊行に向けて作業を進めたまずレイノルズ・クリストファ氏に全体の翻訳を依頼し、それを当委員会の委員が分担して修正した後、葛谷健先生とウィルフレッド・フジモト先生に校閲をお願いした。校閲者による訂正稿につき委員会にて検討し、さらに理事全員による最終確認を経て、平成19年5月の第50回日本糖尿病学会年次学術集会の折に「Treatment Guide for Diabetes 2007」として発行した。なお、学会として1,000部を買い取り、全評議員に配布した。

② 「糖尿病治療ガイド2008-2009」発行に向けて改訂作業に入るにあたり、日本医師会に、櫻井秀也先生に替わって、新たに今村聡常任理事を委員として派遣いただくよう要請し、日本医師会の了承を得た。

③ 本年2月の「第42回糖尿病学の進歩」までに「糖尿病治療ガイド2008-2009」を刊行する方針のもと改訂作業を進め、昨年12月上旬には学術評議員校閲用委員会案(見本)を作成して全評議員に送付した。また今回「歯周病」についての記述を追加した関係から、日本歯科医師会にも送付して校閲をお願いした。この見本に対して、46名の学術評議員および日本歯科医師会から貴重なご意見やご指摘をいただいた。

④ これらのご意見やご指摘を、本年1月の委員会にて検討のうえ、最後の訂正を加えて、本年2月に「糖尿病治療ガイド2008-2009」を発行した。今回の改訂では、全般的により分かりやすい記述に修正するとともに、本年4月から開始された特定健診・特定保健指導のすすめ方、歯周病、認知症、小児の糖尿病、日本糖尿病対策推進会議など新しい項目を追加したほか、糖尿病に関する指標、病歴聴取のポイント、経口薬療法、急性合併症、糖

尿病神経障害などの内容を見直し改訂した。また、新しいインスリン製剤の記載を加え、巻末の付録についても最新の情報に変更した。なお、頁数が増えたことなどから、定価(本体価格)を 700 円に改訂した。

⑤発行部数と売上状況

「糖尿病治療ガイド 2006-2007」

平成 18 年 2 月 第 1 刷り発行 80,000 部,

同 3 月 第 2 刷り発行 20,000 部,

同 4 月 第 3 刷り発行 30,000 部,

同 12 月 第 4 刷り発行 20,000 部

平成 19 年 11 月 第 5 刷り発行 5,000 部(累計発行部数 155,000 部)

平成 19 年 4 月～平成 20 年 3 月末の売上 17,377 部(累計売上部数 147,162 部)

「糖尿病治療ガイド 2008-2009」

平成 20 年 2 月 第 1 刷り発行 80,000 部,

同 3 月 第 2 刷り発行 30,000 部,

同 4 月 第 3 刷り発行 30,000 部(累計発行部数 140,000 部)

平成 20 年 2 月～3 月末の売上 106,363 部(累計売上部数 同左)

(2)インターネット委員会 委員長 田嶋尚子

本委員会は、平成 19 年 5 月 26 日(土)仙台にて開催された。継続審議事項や、学会ホームページへのリンク依頼および広告掲載の許可等については、イ委員会委員メイリングリストを利用して常時、全委員参加のもとに検討している。

①英文ホームページについて

英文ホームページ立ち上げのため、イ委員会内に小委員会(谷澤委員長)を設置しコンテンツ等について検討してきたが、準備が完了し平成 19 年 11 月 9 日に UP した。今後、日本糖尿病学会の紹介の拡大、国際的な学会・研究会・シンポジウムの紹介、日本発のエビデンスや現在進行中の臨床試験の紹介など、内容を充実させていく予定である。

②オンラインジャーナル

学会誌「糖尿病」は、これまで医学書院に委託して UMIN のサーバーに掲載していた。平成 17 年、18 年分は J-STAGE でのオンラインも併用して、どちらが会員にとって有効かを検討することにした。平成 19 年 12 月には J-STAGE のアップロード研修会が開催され、現在、最終設定中である。

J-STAGE では、糖尿病学会ホームページのフロントページに「J-STAGE のかたははこちらへ」という入り口をつくり、これをクリックし全糖尿病学会会員共通

のパスワードを入力すると「糖尿病」にアクセスできる。J-STAGE を使用すると文献検索など便利になるが、UMIN を使用しないことによる不都合が生じないかどうかを検討する必要がある。今後会員のご意見を聞き、どちらにするかを決定する。

学会誌「糖尿病」は平成 20 年 Vol. 51, No3 まで掲載した(平成 20 年 4 月 4 日現在)。

(3)糖尿病性腎症合同委員会 世話人 羽田勝計

平成 19 年度には 2 回の委員会(第 1 回: 5 月 24 日(木)仙台サンプラザホテル: 議長羽田委員, 第 2 回: 12 月 2 日(日)順天堂大学医学部 9 号館: 議長榎野委員)を行い、日本糖尿病学会・日本腎臓学会の委員および日本透析医学会からのオブザーバーが出席し、以下の議題について討議を行った。

①糖尿病性腎症食事療法指導基準の改訂について:

日本腎臓学会の腎疾患食事療法ガイドライン改訂小委員会と調整を行っている(猪股委員)。

②慢性腎臓病(CKD)対策についての現状報告(日本腎臓学会より): CKD 診療ガイドが作成されたことの報告があり、日本慢性腎臓病対策協議会が行う CKD 啓発活動に対し、日本糖尿病学会に昨年に引き続き協力依頼があった。平成 20 年 3 月 9 日(日)東京ガーデンパレスにて、CKD 啓発講演会が開催され、シンポジウムで、合同委員会の 1 年間の活動内容を報告した(羽田委員)。

③糖尿病性腎症の病期分類の改訂について(継続審議)。

④「DNETT-Japan: 糖尿病性腎症の寛解を目指したチーム医療による集学的治療」の進捗状況に関する報告。

⑤JDGP study の登録状況の報告と、委員に対する協力依頼。

⑥透析患者における血糖コントロールの評価法: 日本透析医学会では、平成 20 年度を目途に、透析患者における血糖コントロールのガイドライン作成委員会を立ち上げる予定であると報告された。

⑦大血管障害のリスクファクターとしてのアルブミン尿の基準値を検討する必要性が提案され、今後守屋委員と猪股委員を中心に検討を開始することとした。

(4)移植関係学会合同委員会臓器移植中央調整委員会・臓器移植関連学会協議会報告 委員長 谷口 洋

(i)第 26 回移植関係学会合同委員会が平成 19 年 5 月 31 日に開催され、臓器移植中央調整委員会で選定されていた国立病院機構千葉東病院、東京医科大学八王子医療センター、新潟大学医歯学総合病院、奈良県立医科大学附属病院

の4施設が新規の臓器移植施設として、またかねてより申し出のあった筑波大学附属病院、千葉大学附属病院の認定施設辞退が承認された。従って現在の臓器移植実施施設は14施設となっている。また、7月12日に厚生労働省健康局長から「臓器の移植に関する法律」の運用に関する指針(ガイドライン)の一部改正について、組織移植、死体並びに生体からの臓器移植に関する取り扱いに関する事項の改正の通知があった。

- (ii) 臓器移植中央調整委員会が平成19年11月22日、平成20年3月7日に開催され、藤田保健衛生大学より臓器移植実施施設申請があり、また臓器移植の現状について、平成20年2月20日現在での臓器移植申請は310件であり、内44件が移植手術済み、2件が生体臓器移植、20件が待機中死亡、10件の取り消しがあり、残りの155件がネットワークに登録中であることの報告があった。岩本安彦先生(東京女子医大)が新たに糖尿病学会推薦委員として承認された。
- (iii) 臓器移植関連学会協議会が平成19年9月1日、平成20年2月16日に開催され、ドナー不足やドナーの年齢幅の拡大への対応を主旨とした「臓器の移植に関する法律改正案」の国会での継続審議の経緯とその法改正に向けて国会議員や報道機関への移植の現状と問題点について情報を積極的に提供する方針が示された。

(5) 糖尿病学用語集編集委員会 委員長 石塚達夫
平成18年5月24日第50回糖尿病学会年次学術集会期間中に開催し、糖尿病用語集第2版が刊行(平成17年11月)されて間もないため、まず、アンケート書面の内容を決定した。即ち、1. 用語集第2版の内容についての感想、意見、用語数、収載用語の感想、意見、用語解説に就いての感想、意見、2. 第3版刊行に向けて新たに収載すべき用語、略語、新たに解説を付すべき用語などである。

この内容について7月3日付けで名誉会員、功労評議員、学術評議員に対し送付致した。まず、多くの貴重な御意見をいただきことに感謝すると同時に集計作業に着手した。

このアンケートを集計すると、糖尿病学用語集第2版は内容について「よく出来ている」54%、「かなり出来ている」37%で約9割の方々から評価をうけている事が分かった。用語数に関しても「英和編」84%、「和英編」86%、「略語編」82%と適当とする評価が8割を超えていた。収載用語に関しては「全領域を一通り網

羅している」とする意見86%、新たに付けた用語解説については92%で「付けてよかった」という評価を受けている。

平成19年10月28日の会議でアンケート内容をそれぞれ検討し、新たに収載すべき用語、略語33語、新たに解説すべき用語16語、訂正、削除すべき用語12語が提出されており、これらを委員全員で検討し、第3版の刊行にむけて作業を開始している。

(6) 専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会 委員長 岡 芳知

新しい治療薬剤のことも含めて改訂が必要であり、来年2009年度の糖尿病学会での発行を目指して、今後、作業を行う予定である。

(7) 倫理委員会 委員長 岩本安彦

① 本学会の糖尿病総合対策事業の一つとして行われる「データベース構築」に関して、データベース構築委員会より提出された試験実施計画書の一部変更に関して、持ち回りで審議を行い、承認した。

② 本学会の調査研究委員会として新たに発足した「1型糖尿病に関する調査研究委員会」より提出された「劇症および急性発症1型糖尿病に関する疫学調査」の実施計画書並びに関連書類に関して、持ち回りで審議を行い、承認した。

③ 同「1型糖尿病に関する調査研究委員会」より提出された「1型糖尿病関連遺伝子群の多施設共同研究」の実施計画書並びに関連書類に関して、持ち回りで審議を行い、一部修正の上承認した。

④ 同「糖尿病運動療法・運動処方確立のための調査研究委員会」より提出された「日本における糖尿病運動療法の実施状況に関する調査研究」の申請書、「糖尿病運動療法に関するアンケート」、並びに関連書類に関して、持ち回りで審議を行い、承認した。

(8) 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン策定委員会 委員長 田嶋尚子

平成20年1月11日に東京において、改訂第3版刊行に向けての検討委員会を開催した。出席者は、春日雅人初版編集委員長、野田光彦査読委員会委員長、糖尿病学会事務局、南江堂ならびに田嶋尚子改訂第2、3版編集委員長である。改訂第2版刊行(平成19年5月)から改訂第3版刊行に向けての準備について検討した。

① 出版契約の提携

「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン[改訂第2版]」の出版にあたり平成19年6月、著作権者を

日本糖尿病学会理事長、出版者を株式会社南江堂取締役社長とする出版契約書を締結した。

②検討委員会では以下の件を決定した

改訂第3版の刊行時期(平成22年3月予定)を目標とし、委員会は従来どおり委員(執筆者)、執筆協力者および査読委員の構成とする。本書の位置づけは糖尿病診療にかかわるエビデンス集(平成20年8月までのエビデンスとし、臨床治験は原則として含めない)とし、内容は従来どおり、ステートメント、解説、そして文献+アブストラクト集、とする。改訂の規模は基本的に新規エビデンスの収載で、新たに章(糖尿病と歯周病)を追加する。本書の規模は300頁以下、ステートメントは各章とも1-1.5頁とする。執筆者と査読委員は前例にこだわらず、適任な方をお願いした。初版と同様に、評価に関するアンケート調査を行う。糖尿病専門医、一般医、コメディカルを対象にする。

③平成20年2月初旬、執筆依頼ならびに査読委員就任に関する依頼状を配布し、全員から承諾の返事を頂戴した。

平成20年4月14日に東京において「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン委員会」第1回委員会を開催し、1月の検討委員会での討議事項を確認した。グレードとエビデンスレベルの決定について執筆者間の標準化を計るため、折笠委員から文献検索・文献評価に関するミニレクチュアが行われた。今後の予定は、平成20年11月原稿締め切り、平成21年1-6月、査読委員による査読、査読会の開催と原稿修正、8-9月委員による全原稿の査読、10-11月校閲、平成22年2月最終確認、印刷、製本、3月刊行、である。なお、①学会出版物としての著作権の扱いと原稿料、②利益相反の問題、③本書からの引用・転載に関する許諾の基準、が討議されたが、これらについては、学会の他の出版物にも共通するところから、理事会で検討していただくこととした。

4. 「糖尿病学の進歩」開催について

1) 第43回「糖尿病学の進歩」

会 期 平成21年2月20・21日(金・土)
会 場 長野県松本文化会館、他(松本市)
世話人 相澤 徹(信州大学医学部医学教育センター)

2) 第44回「糖尿病学の進歩」

会 期 平成22年3月5・6日(金・土)
会 場 大阪国際会議場(大阪市)
世話人 三家登喜夫(和歌山県立医科大学医学部臨床検査医学)

5. 平成19年度補正予算並びに平成19年度収支決算に関する件(河盛理事)

総会で審議の上、平成19年度補正予算並びに19年度収支決算書が承認可決された(本号 p692~p730)。

6. 平成20年度事業計画および補正予算並びに平成21年度事業計画および収支予算に関する件(岩本理事・河盛理事)

総会で審議の上、平成20年度事業計画および補正予算並びに平成21年度事業計画および収支予算が承認可決された(本号 p731~p754)。

7. 名誉会員の推薦に関する件

今年度は推薦がなかった。

8. 学術評議員の承認に関する件

理事会が推薦した豊田長康、仁木一郎の2会員が総会において承認された。

9. 次々会長(第54回学術集会)の選任に関する件

学術評議員会にて投票により第54回会長に羽田勝計学術評議員が選出され、総会において承認された。

10. 第52回年次学術集会に関する件

平成22年5月21・22・23・24日の4日間、大阪国際会議場(大阪市)において開催の予定である。

11. 理事および監事の承認に関する件

各支部および理事会から推薦された19名の理事候補者と学術評議員会から推薦された監事候補者2名の就任が承認された。

1. 理 事

北海道支部	羽田 勝計	旭川医科大学内科学講座
東北	岡 芳知	東北大学大学院医学系研究科分子代謝病態学
関東甲信越	渥美 義仁	東京都済生会中央病院
	岩本 安彦	東京女子医科大学糖尿病センター
	門脇 孝	東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科
	河盛 隆造	順天堂大学大学院
中部	田嶋 尚子	東京慈恵会医科大学内科学講座糖尿病・代謝・内分泌内科
	小泉 順二	金沢大学附属病院総合診療部
	中村 二郎	名古屋大学大学院医学系研究科糖尿病・内分泌内科

近畿	稲垣 暢也	京都大学大学院医学研究科糖尿病・栄養内科学
	春日 雅人	国立国際医療センター研究所
	南條輝志男	和歌山県立医科大学
	花房 俊昭	大阪医科大学第一内科
中国・四国	加来 浩平	川崎医科大学内科
	谷澤 幸生	山口大学大学院医学系研究科病態制御内科学
九州	荒木 栄一	熊本大学大学院医学薬学研究部代謝内科学
	梅田 文夫	福岡市医師会成人病センター
理事会推薦	清野 裕	関西電力病院
	堀田 饒	労働者健康福祉機構中部労災病院

以上 19 名

2. 監 事

貴田岡正史	公立昭和病院第一病棟
武田 純	岐阜大学大学院医学系研究科分子・構造学講座 内分泌代謝病態学

以上 2 名

12. 平成 20 年度選挙管理委員会委員の承認について

細則第 38 条により、下記の様に承認された。

北海道支部	柳澤 克之	市立札幌病院内分泌代謝内科
東北	山田 憲一	山田憲一内科医院
関東甲信越	林 洋一	日本大学板橋病院内科 3 部門
中部	榊原 文彦	住吉町クリニック 内科
近畿	中村 直登	京都府立医科大学免疫内分泌内科
中国四国	久保 敬二	県立広島病院 内分泌・腎臓内科
九州	豊永 哲至	国立病院機構熊本医療センター内分泌・代謝内科
会長経験者	田嶋 尚子	東京慈恵会医科大学 糖尿病・代謝・内分泌内科

13. 「糖尿病学の進歩」プログラム委員会について

細則第 42 条により、下記の様に決定された。

第 42 回「糖尿病学の進歩」世話人	石田 俊彦
第 43 回「糖尿病学の進歩」世話人	相澤 徹
第 51 回会長	門脇 孝
第 52 回会長	柏木 厚典
学術担当理事	南條輝志男

14. 専門医認定委員会委員の交代に関する件

専門医認定委員会委員が交代することとなった。

	新	旧
九州支部	浜口和之	大槻 眞

15. 学会後援について

申し込みのあった 11 件全部を後援することとした。

- 第 8 回先進インスリン療法研究会 平成 20 年 12 月 6 日
- 2008 年歯の健康シンポジウム 平成 20 年 5 月 10 日
- 2008 年度全腎協全国大会 in 富山 平成 20 年 5 月 25 日
- 第 51 回日本腎臓学会学術総会シンポジウム 3 「糖尿病性腎症の成因と治療」 平成 20 年 5 月 31 日
- 第 20 回分子糖尿病学シンポジウム 平成 20 年 12 月 13 日
- 糖尿病の予防と治療を目指してーグリコヘモグロビン(HbA1c)認知向上運動ー
平成 20 年 5 月 1 日～平成 20 年 12 月 31 日
- 第二回国際シンポジウム「コメと疾病予防」
The Second International Symposium on “Rice and Disease Prevention”
平成 20 年 10 月 26 日-27 日
- 第 20 回日本糖尿病性腎症研究会 平成 20 年 12 月 6 日-7 日
- 情報計算化学生物学会(CBI 学会)2008 年大会
平成 20 年 10 月 22 日-24 日
- 世界口腔保健学術大会記念「第 14 回口腔保健シンポジウム」 平成 20 年 7 月 5 日
- 糖尿病重症化予防(フットケア)研修会 平成 20 年 6 月 7 日-8 日, 7 月 12 日-13 日
(注: 4. は共催, 9. は協賛)

16. 医学書院との訴訟に関する件

医学書院との著作権訴訟は、和解に向けて検討することとした。本件の経緯を会員に周知し、再発防止に努めることとした。

17. 第 51 回年次学術集会並行企画について

第 51 回年次学術集会並行企画として、糖尿病予防に配慮した弁当を期間限定販売すること、「東京宣言 2008」を行うことを承認した。

18. 会費 2 年以上滞納者に関する件

定款第 11 条第 3 号により会費 2 年以上滞納者 143 名の除名を決議した。

以上 文責 庶務担当常務理事 岩本安彦